

児島虎次郎と支那旅行

Aoki, Kahori / 青木, 香保里

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

9

(開始ページ / Start Page)

50

(終了ページ / End Page)

43

(発行年 / Year)

2012-03-23

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008318>

相良匡俊先生退官記念論文

児島虎次郎と支那旅行

社会学専攻修士課程2年

青 木 香保里

児島虎次郎は1881（明治14）年に岡山県川上郡下原村（現高梁市）に生まれた。1902（明治37）年に東京美術学校西洋画科選科に入学した頃、郷里の弁護士桜生熊太郎の紹介によって倉敷の実業家大原孫三郎に出会った。そして大原孫三郎の援助で1908（明治41）年にヨーロッパに留学した。児島虎次郎は、フェノロサ・岡倉天心を中心に日本の伝統的美術の評価や狩野芳崖や横山大観を中心とする日本画が主流であった明治文化期において、黒田清輝の滞欧帰国後に白馬会を中心としたフランス印象派の影響を受けた一人であり、日本を代表する西洋画家である。その画才は芸術の中心であるパリのサロン・ナショナルにおいて評価をされるという輝かしい成果を得た。児島の代表作である《和服を着たベルギーの少女》は、現在大原美術館の正面を飾っている。その画業と並んで、児島にはもう一つ重要な業績としてヨーロッパ・アジアでの絵画・工芸品の収集がある。児島が探し出し、大原の出資によって購入された作品群は現在、岡山県倉敷市にある大原美術館に収蔵されており、近代の西洋美術を展示する日本最初の美術館である大原美術館の創設に尽力したことである。

五〇

筆者は児島虎次郎の研究において、岡山県立図書館で児島虎次郎の長男である児島城一郎の『児島虎次郎 三十三回忌供養志』（1961年）という

児島虎次郎と支那旅行

一次資料を入手できた。その中には、ほとんど手つかずとっていい資料であった「支那行」や「支那に遊びて」など従来一次資料として用いられていなかった文書が入っていた。特に「支那行」は、児島のアジアに対する研究が深くすすめられておらず、ほとんど言及されることのなかった児島の中国・朝鮮の文化理解を分析する上で役立った。これまで、先行研究としての松岡智子と時任英人の『児島虎次郎』（1999年）や『没後70年 児島虎次郎』（2000年）、『生誕130年 児島虎次郎展』（2011年）には、巻末に資料として児島虎次郎の随筆や児島虎次郎のことを書いたものがある。しかし、「支那行」に関する資料は紹介されていない。2011年春に発刊された『生誕130年 児島虎次郎展－あなたを知りたい』においても、参考文献で1961（昭和36）年に出版された児島虬一郎の著書を、「児島虬一郎著？『児島虎次郎三十三回忌供養志』」と「？」マークを付しており、実際にこの文献を手にして、確認している形跡はない。

筆者は、2011年夏、岡山県立図書館で、児島虬一郎の『児島虎次郎三十三回忌供養志』を見つけることが出来た。複写許可がなかなか下りず苦労したが、この本の全部を複写することが出来た。『児島虎次郎三十三回忌供養志』は、児島虎次郎の「略年譜」からなっている。児島直平が「児島日記」をもとに書いた「児島略伝」（1967年）ほど「文学性」の豊かなものではないが、身内ならではの簡潔な文による「略年譜」となっている。筆者は、主に児島直平著の「児島略伝」と児島虬一郎著の「略年譜」を比較検討する中で実証的に年譜の対比を追求した。

＊

四
九

これまでの児島の中国旅行に関する研究は、「児島略伝」による記述のみを分析し、紹介するものであった。『児島略伝』は、児島虎次郎の「日記」に書かれた記載である。

たとえば、1918（大正7）年『児島略伝』の記述では、「4月15日（月）、通訳を雇い、拱州府に公立貧民工場、貧児院、育嬰堂を見学」とのみある。ところが、「支那行」では、詳しく内容が書かれている。2点紹介したい。第1点として、なぜ児島はそういった場所を見学したのか、そこでは何を見たかったのか、どのように評価しているかを紹介したい。第2点は、「支那」文化や「朝鮮」文化をどう捉えているか、東洋文化の源流を探る意図や、東西文化の融合についての児島がどう考えたかを紹介したい。

まず、第1点についてみる。4月15日に杭州で訪問した「拱州府の公立貧民工場、貧児院、育嬰堂」について、5回にわたって連載されている。

例えば、「貧民工場」は、「16才より40才迄の貧民男子にて現在350人余午前午後技術実習、夜間国文算術を授業するものに候」、「実技科目は木綿織物、タオル、籐竹細工、木綿男子用帯地、木綿靴下石けん、家具木工、漆器等にして卒業は大抵一箇年にして或は二箇年の者もあり、卒業後は各適当雇主を求め月収十円以上十五円位を得る由」、「民国二年設業以来卒業者を出す事三百余人」とある。

「浙江省立貧児院」は、「8才より15才迄の男子のみ二百余人を収容致居候」、「現在は学業を課するのみなれど追々は貧民工場に於けるが如く竹細工、裁縫、磁器、彫字及び農業を課する計画の由に候」、「女子の収容所は全省皆無なるは不思議のように候へ共、女子は夫々他に生活の道を得らる者と存じ候」とされている。

また、「60年前清朝時代に設立せしものにて」、「現今此に収容せる者百三十余人他に館外家庭に預け養う者三百余人総てにて五百に近く其収容児は生後直ちに捨つる嬰兒より三才位迄とし、不具者は特に年令以上に達するも尚収容を続け居候。乳母の館内に雇わるるもの六十余人乳多きものは二児を養ひ居候。併だし貰子を望むものには誰にても無条件に与へ毎日貰子に来る者平均一人を降らざる由に候」とある。この子達の多くが「貧民の捨て子にして自然發育悪く、遺伝的病児など多く、（中略）盲目或は視

児島虎次郎と支那旅行

覺を失したるもののみ収容され、其悲惨何以無慙幼幼心と叫ばしめ候。総て之等の事業には一切宗教關係之なき由」と記されている。

この文を見ると、杭州の「貧民」を対象とする「公立職業訓練校」、「孤児院」、「育嬰堂」の詳細な様子が見受けられる。

「児島日記」に記載されていない「貧民工場」見学もあった。「漢口にて貧民工廠を訪れた」である。これは先行研究が記していない新事実である。

「児島日記」には、5月29日午後、天津で「育英堂を参観す。此処は貧児院と嬰兒院を合わせたもの百数十年前の創立。現在収容三百余人、ほとんどが女子」とある。

「支那行」ではこの内容が詳しく書かれている。

こうした「社会福祉施設」の実態をなぜ児島虎次郎は見学したか。考えられる理由は2つある。1つ目は、恩人大原孫三郎の「人道主義」の影響か、もう一つは、義父石井十次の「福祉」の影響である。児島は、〈なさけの庭〉で石井十次の岡山孤児院を描いてデビューした。この作品は皇室買い上げ作品となった。しかし、児島虎次郎が中国の社会福祉施設の様子を絵画に描いた形跡はない。

2つ目の理由として、児島が中国や朝鮮の美をどのように捉えたかを論究したい。

児島が「支那行」で記述したのは上記の社会福祉施設以外は、観光地、歌劇（京劇）民族音楽、民族衣装が中心である。児島が帰国した後、中国民報社記者の郡山辰巳に語った記事が1918（大正7）年7月7日から9日にかけて「支那に遊びて」として連載された。この記事も「児島虎次郎三十三回忌供養志」に掲載されており、児島は「美術以外で耳目を惹いたものは其国民性、自然、裏面的な諸象である」と述べている。

支那の事物が全く欧州のものと源を等しく小異あるも大同なるものと存じ支那は東洋にあらずこれは西洋と呼ぶ欧州と陸つづきの親類に御

座候然し支那人が日本人を呼ぶに東洋人なる話を以てする如く全くの東洋人は日本人一種族の様に存ぜられ候日本の総ては支那が西洋に類するに比ずれば全く支那と似たる事物これなしと云ふも過言にあらずと存じ候。欧州の文明は支那の古文明に負ふ所多々あるものと存じ候毎度ながら支那の深大なりし開化には感じ居り候。

支那の建築は非常に進歩したものである。近来は日本に模して煉瓦、石造建築でも煉瓦なり石なりを外部に露して居るが支那古来の建築では内部の骨組なのである。それを彩色を施し紋様などを描いてある木造建築でも粗雑な荒削りなものを麻などで覆ひ塗料を施したものであった。夫が近代化しつつあるのは浅薄なる模倣で大家であらねばならぬ。自今は萬事洋化しつつある日本の創造したものは殆ど何もない。夫程日本文化の貴重は支那的なものである。(中略) 私は充分支那を理解し尊敬すべきだと思ふ。画家も欧羅巴に学ぶよりか手近な支那に学ぶべきである。欧羅巴は支那に具はつて居るから。

中国旅行に関しては、『児島略伝』が児島日記の簡潔な記述をとりあげて、児島が各地で見た作品について「見るほどのものなし」、「感心するほどの作でない」と失望感を表明しているのに対して、子供芝居は「なかなか面白い衣裳も立派」、中国の伝統音楽についても「音調悲哀の調に傾くとも優美なる音調はとても欧州音楽に求めて得ざるものである」と「衣裳」、「音調」に興味を示していることを記録している。「支那行」や「支那に遊びて」を読む限り、児島が「支那」文化に傾倒したことがわかる。また、児島の発言が、中国が「弱肉強食」の趨勢の中で列強に侵略され、ことに辛亥革命後の中国が貧しく混乱していた当時のものであったことを考慮し

児島虎次郎と支那旅行

ある。『児島略伝』には、次のように書かれている。

早朝下の谷間に降りて流れに布洗う婦女の姿に興を求む」「早朝より下の溪流に洗濯に集まり来る婦人たちが、緑柳の下に衣打ちつつ語り合うさまは、まったく朝鮮ならでは見られざるところ、その白衣の婦人の群れをスケッチ」「若き娘の淡紅の上衣に淡緑の被衣を着け、頭に布を盛った籠を載せ、谷の流れに水溜りを尋ね歩む姿の清楚なるあり、是非描き試みたく思えり。

この後、日記に「3日間空白があるのは制作のためか」と書かれているように児島虎次郎の創作意欲は高い。児島は「洗濯する女」、「砧を打つ女」、「白衣（チマ・チョゴリ）の女」、「若き娘の淡紅の上衣に淡緑の被衣を着け、頭に布を盛った籠を載せ、谷の流れに水溜りを尋ね歩む姿」に魅かれ、女性の衣裳や洗濯し砧を打つ姿に朝鮮の美として受けとめた創作意欲を高めていくさまが理解できる。柳宗悦のように直接行動を取ることはしないものの、朝鮮の情景が児島の創作意欲を強く刺激したことを意味している。

児島は「支那行」の中でも、次のように書いている。

清そなる装、鮮なる自然、気品満てる光景に接して我に技なく材なきを恨み申候、緑草緑樹、白衣の群総て清く鮮かならざるものなし朝鮮とは良き名なりと存じ候、人の衣の清きを見て、我旅衣の汗埃になりたるを覚へ家郷を出でて早も三月に近き旅の日を数え申候。

四
五 ここから、児島の「朝鮮美」への好意的な態度が読み取れる。さらに、「朝鮮の美」だけでなく、「朝鮮の国民性」への言及もある。

朝鮮で感得したものは気品である。気品といふことは特に研究すべき

価値のあることだと思う。国を亡ぐ程慾に乏しいことが気品に秀でいる所以であらう。労働者でさえ日本人に多く発見し難い気品を備へ朝鮮人の群れに日本人が混つて居れば其容貌の卑しい点で直に発見されるであらう。朝鮮の音楽や歌曲が悲音に満ちた亡国の哀調を帯びて居ると倣すのは間違ひで、そんな感じとは異なった、静かさと穏やかさを帯びた静雅な気分の起る気品の具はつたものである。朝鮮から気品を奪ひ去つたならば墮落であり、無価値である。美術品、風習も支那は華麗且豊富であり、朝鮮は質素で気品に富んでいる。

1918（大正7）年は、「韓国併合」が行われて8年の歳月が過ぎてた時期である。植民地になった朝鮮では、日本による厳しい支配が行われており、貧富の格差も激しいものがあつただろう。翌年には朝鮮全土で三・一独立運動もおこっている。そうした中で、兎島の眼差しには見下したところがなく、朝鮮人の「気品」を論じている。兎島の「人格」に筆者は称賛を送りたい。

Kojima Torajiro: analysis of his art and thought

Aoki Kahori

Student number 10q4202 Sociology major International Japanese Studies

Institute Hosei University Graduate School Supervisor: Prof. Sagara Masatoshi

Abstract

Kojima Torajiro was born in 1881 in Okayama. In 1902, when he entered Tokyo University of the Arts, he met Ohara Magosaburo who was a businessman in Kurashiki. Magosaburo supported Torajiro not only for his living but also for his art work. Magosaburo helped Torajiro go to Europe to study art. The main activities of Kojima were painting around the world and collecting European paintings.

Earlier study of Kojima Torajiro took large steps in three stages. First, basic literature was written by his relatives in the 1960's. Second, his materials was ordered, and his autobiography was completed in 1990's when the Nariwa Museum was established. Third, the Ohara Museum analyze Torajiro's works from different views and made new data on the occasion of his 130 birthday. I introduce these earlier studies and make new hypotheses.

In addition to these precedence studies, I analyze Torajiro's accounts of his Asian journey which are included in "Kojima Koichiro's Kojima Torajiro sanju kaiki kushoshi" (In memoriam Kojima Torajiro 32 years agter his death"). These are difficult to obtain, so this is his first study of them. I have found that Torajiro visited welfare institutions, and I analyze his humanittarian thought , which was influenced by his father-in-law Ishi Juji.